

楽曲解説

[解説] 宮澤 淳一

3/12(日) 第891回オーチャード定期演奏会

3/13(月) 第108回東京オペラシティ定期シリーズ

3
123
13

本日の演奏会について

ロシア音楽の特徴とは何であろうか。憂愁と哀感に満ちた旋律、濃密な響き、素朴だが力強いリズム……。かの国の音楽には、そうした要素で、魂をじかに揺さぶる力がある。本日の演奏会で取り上げるチャイコフスキーとラフマニノフは、まさにそういう力を存分に発揮した作品を書いた。

ピョートル・イリイチ・チャイコフスキー(1844-1893)は、19世紀のロシアを代表する作曲家である。彼は、ロシアで最初に正規の音楽教育を受け(ペテルブルク音楽院第1期生)、西欧的な素養を存分に生かしつつ、ロシアの民族色豊かな音楽をバランスよく探求した。国内ばかりか、生前から欧米で本格的に認められた初めてのロシア人作曲家でもある。

ピアノ曲からオペラやバレエ音楽まで多作を誇ったチャイコフスキーだが、オーケストラの演奏会で頻繁に取り上げられるのは交響曲第4～6番である。交響曲第4番については本人が「宿命」との対決の物語を書き残しているが、続く第5番も、そして本日演奏される第6番『悲愴』も、「宿命」のテーマが関係している可能性がある。実際、チャイコフ

スキーの生涯は結婚の失敗など、まさに「宿命」に翻弄された側面があった。しかし、そうした予備知識がなくても、彼のロマンティックな音楽は雄弁に語りかけてくるであろう。

チャイコフスキーの没後、そのロマンティズムの継承者として最も成功したのがセルゲイ・ワシーリエヴィチ・ラフマニノフ(1873-1943)である。彼は20世紀に活躍しながらも、前衛的な音楽運動に関与せず、後期ロマン派のスタイルを貫き、あらゆるジャンルで名曲を残した。ピアニストでもあった彼の作品で特に目立つのは、みずから多くを実演したピアノ曲であり、ピアノ協奏曲もそこに含まれる。

ラフマニノフもチャイコフスキーに劣らぬメロディー・メーカーだったが、憂愁や哀感は、チャイコフスキー以上に強かったかもしれない。実際、ラフマニノフはロシア革命の混乱を嫌って西側に亡命し、以後はもっぱらピアニストとして生計を立てた。故国を離れた彼の郷愁はどれほど深かったことか——。もともと、今回演奏されるピアノ協奏曲第2番を含め、「郷愁」に満ちた傑作の大半が書かれたのは、実は、亡命する以前だった。

ラフマニノフ (1873-1943) ピアノ協奏曲第2番 ハ短調 作品18

- I. モデラート(約11分)
- II. アダージョ・ソステヌート(約11分)
- III. アレグロ・スケルツァンド(約11分)

ヴィルトゥオーゾ・ピアニストでもあったラフマニノフは、ピアノ協奏曲を全部で4つ書いた。最も有名なのがこの第2番で、後期ロマン派のスタイルを貫いた彼の保守性の最良の部分が実を結んだ傑作である。

1891年、18歳でモスクワ音楽院ピアノ科を、翌年に同音楽院作曲科を卒業したラフマニノフは、演奏家兼作曲家として国内外の注目を浴び、将来を期待された。ところが、1897年3月に最初の大作である交響曲第1番の初演が失敗した衝撃で鬱状態になり、作曲活動から離れてしまう。オペラ指揮者への転身も試みる。翌々年、成功裏に終わった英国公演の際、ピアノ協奏曲を依頼され、創作に着手するものの、精神的に不調が続き、作曲ばかりか、日常生活にも支障が出たらしい。そこで、1900年初頭より精神科医のドクトル・ニコライ・ウラジーミロヴィチ・ダーリ(従来は「ダール」と表記)の治療を受け始める。

ダーリは1860年ウクライナ生まれで、モスクワ大学卒業後、フランスで催眠療法を学び、モスクワで開業した人だ。彼

は肘掛け椅子に夢見心地で座るラフマニノフに、毎回、こう言い聞かせたという——「あなたは協奏曲を書き始める……いともたやすく書くことができる……協奏曲は大評判となる。」

これが功を奏し、ラフマニノフは快方に向かい、5月には創作を再開。12月に第2楽章と第3楽章のみをモスクワで初演し、好評を得た。その後、第1楽章を書き加えて、全曲が翌1901年4月に完成。10月27日に、アレクサンドル・ジローティ指揮モスクワ・フィルハーモニー管弦楽団との共演により、ラフマニノフ本人の独奏で初演される。結果は大成功で、当時28歳だった彼は自信を取り戻し、再び作曲に励むようになった。作品はダーリに献げられた。(ダーリは1925年にレバノンのベイルートに移住。1939年に同地で没した。ヴィオラが堪能で、1928年にベイルートの大学オーケストラの一員としてこの協奏曲を演奏した際、彼が立ち上がってお辞儀をするまで聴衆が納得しなかったという。)

第1楽章 モデラート、2/2 拍子、ハ短調。 鐘の響きを思わせるピアノの連打で始まる。この連打は弱音から徐々に高まり、やがて分散和音に転化する。この分散和音を伴ってオーケストラが厳かに演奏するのが第1主題(ハ短調)であ

る。ピアノの超絶技巧的なパッセージとオーケストラの咆吼のあと、静まったところでピアノが甘美な第2主題(変ホ長調)を奏でる。この楽章はこの2つの主題によるソナタ形式で書かれ、展開部を経て再現部をもって終わる。独奏ピアノは高度の技巧を駆使しつつも、オーケストラとの一体感が強く、カデンツァはない。

第2楽章 アダージョ・ソステヌート、4/4 拍子、ホ長調。 三部形式。全体に夢想的な雰囲気をつたえた楽章で、ピアノはほとんどの場面で分散和音を奏でてオブリガート風の役割を担う。序奏のあと、フルートが甘美な主題を吹奏し、クラリネット、ピアノがこれを受け継ぎ、情感が高まる。中間部は、主題から派生した哀感に満ちた短調の旋律をピアノが歌う場面から(ウン・ポーコ・ピウ・アニマート)。やがて音楽は加速し、オーケストラの一撃を合図にカデンツァが入り、冒頭の静かな主部が回帰して終わる。

第3楽章 アレグロ・スケルツァンド、2/2 拍子、ハ長調。 ロンド=ソナタ形式で、曲調はめまぐるしく変化する。冒頭では、低音弦を主体にして、おどけた調子の行進曲風の旋律が始まる。これが第1主題と考えられるが、実は第1楽章の第1主題の変形である。やがて独奏ピアノがこの主題を総括すると(メノ・モッソ)、「モデラート」でオーボエとヴィオラが憂愁に満ちた甘美な旋律を持ち込む(第2主題)。この楽章は、オーケストラ

を休ませてピアノが独奏する箇所が多く、末尾近くにカデンツァも用意され、名人芸を披露する意味でも、曲全体の構成の点でも、効果的な楽章である。

この作品はメロディーの宝庫であり、やがて映画やポピュラー音楽にも取り入れられ、いっそう親しまれるようになった。映画で代表的なのは、『逢いびき』(デイヴィッド・リーン監督、1945年・英国)や、マリリン・モンロー主演の『七年目の浮気』(ビリー・ワイルダー監督、1955年・米国)である。ポピュラー音楽では、フランク・シナトラが1945年に歌った「寂しい私(Full Moon and Empty Arms)」に第3楽章第2主題が用いられており、加えてシナトラの1957年の「アイ・シンク・オブ・ユー(I Think of You)」の旋律は第1楽章第2主題である。さらにエリック・カルメンの1975年のヒット曲「オール・バイ・マイセルフ」では、この協奏曲の第2楽章が活用されている。また、原曲はフィギュアスケートの競技でしばしば用いられ、スケーターの優美な動きを引き立たせている。

【楽器編成】 フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器(大太鼓、シンバル)、弦楽5部

チャイコフスキー (1840-1893) 交響曲第6番 口短調 作品74 『悲愴』

I. アダージョーアレグロ・ノン・トロツポ(約18分)

II. アレグロ・コン・グラツィア(約8分)

III. アレグロ・モルト・ヴィヴァーチェ(約9分)

IV. フィナーレ・アダージョ・ラメントーソ(約11分)

チャイコフスキーは、番号の付されたものとしては6つの交響曲を残し、特に実演の機会が多いのは第4～6番である。この3曲にはどれも「宿命」というテーマが関係しているとも考えられるが、第6番「悲愴」の意味するところは今なお謎めいている。

1893年の2～3月に着手され、8月に完成。10月16日、ペテルブルクにてチャイコフスキー本人の指揮によって初演される。当時53歳の彼は5日後の10月21日にコレラを発症し、その余病で25日に急逝。29日には同地で埋葬された。ひと頃騒がれた「自殺説」は否定されているものの、この交響曲とチャイコフスキーの死との関わりは神秘的である。

この作品を着手した頃、甥のゴブ(ヴラジーミル・ダヴィドフ、当時22歳)に宛てた手紙に構想が述べられていた——新しい交響曲は標題音楽だが、標題の内容は秘密にしておきたいので、あえて

「プログラムナヤ・シンフォニーヤ(標題のある交響曲)」と命名したい、と。初演の翌日、出版譜用に題名を付す段になると、チャイコフスキーは、弟モデストが提案した「トラギーチェスカヤ(悲劇的)」を却下。弟が次いで「パテティーチェスカヤ(パテティーク)」を提案したところ、それを気に入り、採用したという。

今日、「パテティーク」は、ベートーヴェンのピアノ・ソナタ第8番同様、日本語では「悲愴」が定訳だ。だが少なくともロシア語の「パテティーチェスカヤ」とは「燃えるような興奮に満ちた」の意味なので、この題名は「情熱」と読み替えるべきかもしれない(この題名の解釈については、学界では一柳富美子氏がいち早く指摘し、注意を促してきた)。ただし、モデストの提案にみられたように、「悲劇的」な要素が否定されるわけではあるまい。チャイコフスキーが封印した本当の「標題」が何であったのかも含め、作品の探究は終わっていない。

第1楽章 アダージョー——アレグロ・ノン・トロツポ、口短調、4/4 拍子。変則的なソナタ形式である。導入部(アダージョ)は陰鬱なファゴットの独奏で始まり、やがてその動機を用いた第1主題がヴィオラとチェロで現われ、主部(アレグロ・ノン・トロツポ)が始まる。激しく盛

り上がったあとにヴァイオリンとチェロが哀しげだが強い情熱をこめた第2主題(アンダンテ、二長調)を奏でる。やがて始まる展開部(アレグロ・ヴィーヴォ)は、第1主題のみで構成された激しい音楽である。アンダンテに戻る再現部ではフルートとヴァイオリンの主導により、第2主題のみが反復されていく。弦のピチカートが4拍子をゆったりと刻むうちに音楽は終結する。

第2楽章 アレグロ・コン・グラツィア、二長調、5/4 拍子。チェロが5拍子(2拍子+3拍子)の不思議なワルツを奏でる。三部形式。中間部では口短調に転調し、落ち着いた下降音階的な旋律が現われる。背景でティンパニとコントラバスが刻む拍節が追い立てるように不安を高める。主部に戻ると、やがて木管楽器群によるコラル風の下降音階が聞こえてくる。舞踏会終了の合図のようで、やがて「会」はお開きとなる。

第3楽章 アレグロ・モルト・ヴィヴァーチェ、ト長調、4/4 拍子(12/8拍子)。表示にはないが、躍動的で諧謔的な「スケルツォ楽章」である。弦楽器が三連符で冒頭からめまぐるしく動く(主題)。実は、戯れのスケルツォとして始まりながら、勇ましい行進曲として終わる奇妙な楽章である。楽章の途中では、「タ

タタターン」とベートーヴェンの第5交響曲の「運命の動機」も聞こえてくる。

第4楽章 アダージョ・ラメントーソ(嘆き悲しむような)、口短調、3/4 拍子。冒頭から弦楽合奏が悲痛な旋律を歌い上げる。やがて弦楽が別の情感豊かな旋律を反復し緊張を高めていく。オーケストラ全体が鳴りやむ。再び始まる音楽で曲想は増幅され、最高潮を過ぎたところでゴングの音がひとつ静かに鳴り響く(何か終結の宣告であろうか)。続いてトロンボーンとチューバの四重奏が進行する。コントラバスがリズムを刻む中、弦楽の各部が旋律を弾き交わしながら、音楽は寂しく消える——。

ちなみにチャイコフスキー本人はこの楽章の自筆譜に「アンダンテ」と書き込み、初演の直前にテンポを変更していたことが判明している。その事情はいささか複雑だが、テンポとは相対性の強い要素だから、この楽章のテンポも、作品全体のバランスや演奏時の諸条件に応じて、指揮者が臨機応変に決めることとなり、さまざまな解釈や効果がありえるであろう。

【楽器編成】フルート3(3番はピッコロ持ち替え)、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、打楽器(大太鼓、シンバル、タムタム)、弦楽5部

みやざわ・じゅんいち／青山学院大学総合文化政策学部教授。音楽批評・文学研究・メディア論。著書に『グレン・グールド論』(春秋社・吉田秀和賞)、『マクラーハンの光景』(みすず書房)、共著に白石美雪編『音楽論』(武蔵野美術大学出版局)、訳書に『リヒテルは語る』(ちくま学芸文庫)、『改訂新版 音楽の文章術』(共訳、春秋社)など。